

一般演題 2 O2-07

本邦における科学者ダイバーの就労時安全向上に係る日本サング礁学会の活動

○森松嘉孝^{1,2)} 中野義勝^{2,3,4)} Agostini Sylvain^{2,5)}
 安田仁奈^{2,4)} 菅浩 信^{2,3)} 水口裕尊^{2,6)} 福岡幸二^{2,7)}
 望月 徹^{2,8)}

- 1) 久留米大学医学部環境医学講座
- 2) 日本サング礁学会調査安全委員会
- 3) 九州大学浅海底フロンティア研究センター
- 4) 東京大学大学院農学生命科学研究科生圏システム学
- 5) 筑波大学下田海洋リサーチセンター
- 6) 東京大学大学院農学生命科学研究科環境安全管理室
- 7) BCP&BCM コンサルティング
- 8) 東京慈恵会医科大学環境保健医学講座

【背景】

サング、水中遺跡、海底地形など、潜水を伴う研究者は科学者ダイバーと呼ばれ、欧州ではKUMASによる厳格な基準が設けられている。米国や豪州においても、潜水に関する専門的な技術や安全対策を半年間学ぶトレーニングプログラムが設けられている。一方、日本の大学および研究機関において2006年までの10年間で10名近い死傷者が発生しているが、科学者ダイバーの潜水や安全に関する基準は存在しない。日本サング礁学会は、2002年に「第一回調査ダイビングにおける事故防止と安全管理に関するアンケート」を実施して以降、公開議論や学会ニュースレターで事故防止に向けて呼びかけ等を行ってきたが、その後も研究員や潜水調査員の死亡事故が発生した。このため、日本サング礁学会は調査潜水の現状把握と安全管理のために、新たなアンケート調査を行うとともに、調査安全委員会へ複数名の外部委員を迎え、我が国における科学者ダイバーの安全向上に向けて動き出した。

【方法】

日本サング礁学会のHPにてアンケートに関する情報を明示し、学会メーリングリストへ案内を送った。また、2024年11月宮崎市で行われた第27回日本珊瑚礁学会総会にてアナウンスを行い、学会会場正面にQRコードを設置した。

【結果】

学会員約600名のうち回答数は77、うち職員63名、学生14名であった。雇用体系は43名がフルタイム正社員、10名がフルタイム非正社員、6名がパート雇用、2名がボランティア、1名がポスドク、1名が役員であった。研究フィールドは71名が現地調査で、調査潜水の手法はスタッフがスクーバ、スキンドайビング/シュノーケリング、ウ

オーキングの順に多く、学生ではスキンドайビング/シュノーケリングが最も多かった。調査における安全ガイドラインが提供されているか否かは、38名が有り、24名がなし、9名がわからないと回答した。また潜水ガイドラインが提供されているか否かは、33名が有り、21名がなし、4名がわからないと回答した。自由記載では、指導教官の技術不足、安全規程がないことや規定の変更がなされていないことが問題とされていたが、現場の調査に制限がかかるようなガイドラインの策定に対する懸念があった。

【まとめ】

サング礁を研究フィールドとする学会員の多くは現場調査を行っており、学生も含めて潜水やスキンドайビングを行っていた。調査や潜水に対する安全指針の策定は不十分であることが判明したが、一方では安全マニュアルの有無を知らない割合も少なくなかった。現場調査が大切な研究フィールドでは安全マニュアルの策定が必要であるが、調査者の安全に対する関心が不足しており、今後は他の調査分野も含めて、安全に対する意識改革が必要であると思われた。